

エックハルトにおけるアナロギア論研究序説

山崎 達也

1. はじめに

本論は人間が神に近づこうとするダイナミックなプロセスとしての倫理的原理としてエックハルトのアナロギア論にアプローチする試論である。

その意味から、はじめにエックハルトの『集会の書に関する講義と説教』(Sermones et lectiones super Ecclesiastici)を中心として彼のアナロギアに関する記述を確認し、次に神と被造物とのアナロギア関係に適用される存在 (esse), 一 (unum), 真 (verum), 善 (bonum) に対する彼の解釈をみる。そして人間が人間であるための条件に対する彼の見解の特色をみ、最後に受肉と子の意義について『ヨハネ福音書註解』(Expositio sancti evangelii secundum Iohannem)を中心にみていくことにする。

2. アナロギアに関するエックハルトの記述

旧約外典『集会の書』第24章29節「私を食する者はお餓える」(Qui edunt me, adhuc esuriunt)における講義のなかでエックハルトは「アナロギア的なもの (analogia) とは事物によるのでもなく、また事物における差異によるのでもなく、一にして全くの同一なる事物の様態によって (per modos unius eiusdemque rei simpliciter) 区別される」¹⁾と述べ、同名同義的なもの (univoca) および同名異義的なもの (aequivoca) との対比においてアナロギアを定義し、有名な「健康の比喩」を用いて、その説明を行っている。続いて彼は「存在者および存在 (ens sive esse) そしてあらゆる完全性、特に存在、一、真、善、光、義のようなことに普遍的なものは、神と被造物においてはアナロギア的に語られる」²⁾と述べている。ここから、例えば善性や義は自らの善なるあり方を、自己以外の、それがアナロギア的關係にあるものすな

わち神から所有している、ということが導かれる。またさらには「すべての被造的存在者 (ens creatum) は存在, 生, 思考を被造的存在者である自己からではなく, 現実的に (positive) かつ根源的に神からそして神において (a deo et in deo) 所有している³⁾と結論づけられる。

こうしたアナロギア関係にある二つのものにおける特徴は『創世記譬喩解』(Liber parabolarum Genesis) 第22節から第26節にわたって, 能動者 (activum) と受動者 (passivum) という二つの原理の関係に即して, 以下のように, 展開されている⁴⁾。1) 能動者は受動者との共通な質料を持っていない。したがって受動者との共通な類も持っていない。2) 能動者は受容するものなく働く。3) 能動者が不在になるやいなや, その働きは受動者の中にとどまることはない。4) 受動者は常に能動者を渴望している。5) 受動者は能動者の豊かさと榮譽を称賛し告知するが, 自らは自らの欠乏性と空虚性を示す。6) 能動者はそれ自身において豊かなもの (dives per se) である。すなわち能動者はいかなるものからも何も受け取ることなく, すべてのものと個々のものに自己自身とそれらがそのものとして固有なるものすべてを与える。能動者と受動者との以上のような関係が『集会の書に関する講義と説教』のなかでは神と被造物との関係として語られている, ということは容易に理解されることである。

エックハルトがアナロギアの論理の使用によって強調することは創造者である神と被造物との決定的な差異である。つまり神においてはその神的なるものの属性すなわち無限性 (infinitas), 単一性 (simplicitas), 純一性 (puritas), 卓越性 (prioritas) が強調される反面, 被造物の弱性 (infirmetas) と虚性 (nulleitas) が露にされる。被造物は自己のうちに自らの存在の根拠を有していないがゆえに, 絶対他者である神から (a deo) 存在を受け取る。また被造物は神において (in deo) 存在を受け取る。なぜなら神は存在そのものであり, 神は自己のうちにすべてのものを創造するからである。神はすべてのものを包み込むというあり方において, 神はすべてのものの最内奥に存在している。その意味において神は「第一原因」(causa prima) と呼ばれる。「私を食する者はおおにやうである。」要するに, 被造物は最も外に存在している神に自らの存在を常に (semper) 渴望し, 最も内なる神から自らの存在を食している。被造物は自らの存在を, エックハルト自身の言葉を借りれば, 「借用」(mutuo) しているのである。

さて, エックハルトはこうしたアナロギア関係にある二つのものの中に恩寵 (gratia)

という神学的概念を導入する。彼は『ヨハネ福音書註解』第182節において「質料においても類においても能動者と受動者とが一致しないアナログア的なものにおいては、受動者は自らが有するすべてのものを上位のものから生じている。なぜなら、このことは、その固有性としての上位のものから生じているからである⁹⁾」と述べている。被造物が自らの存在を受け取るのは実は神の純粹なる恩寵からである。以上のことを踏まえた上で、以下において存在、一、真、善という超範疇的概念がいかなる意味と構造を有しているか、ということ、『ヨハネ福音書註解』を中心にして考えてみよう。

3. 四つの超範疇的概念の意味と構造

エックハルトは『ヨハネ福音書註解』第562節において「これら四つのものは同一のものであり、主体 (suppositum) ないし基体 (subiectum) に関しては実際に置換されうるが、それに固有の意味内容 (ratio) またはそれぞれの属性によって区別される⁹⁾」と述べている。以下、これらの個々について彼の解釈を検証していきたい。

まず存在については同第512節において「存在は内奥と本質に関わりまた完結するもの (absolutum)、無限定な者であるから、その意味からすれば、いかなる産出の始原でもない」と定義され、「生むものでも生まれるものでもない」(nec generare nec generari) と性格づけられている⁷⁾。次に一については同第513節において「四つのなかでは最も直接に存在に関わり、最初にかつ最小限度に存在を限定する」、「一そのものにはその本質と属性から最初に産出するものでありまたすべての神性と被造物の父であることが帰属する」と述べられ、「生まれざるものであるが生むものである父である一」と定義している⁹⁾。さらに、一および一性 (unitas) はすべての流出の第一の始原であり、否定の否定 (negatio negationis) 以外のものは存在の上にも何も付加することはない。その意味において、一は「始原のない始原」(principium sine principium) と性格づけられる。さて真については同第562節において「真は、その属性からして、事物と知性とのある種の統一 (adaequatio) でありかつ認識されたものと認識するものの子孫 (proles) であるから、生むことのない、生まれた子 (filius) に関わっている⁹⁾」と述べられている。それに対し善は一と真とから生まれるものとして聖霊 (spiritus sanctus) に帰せられる。しかし真と善は、被造的存在者においては、魂の内なる「認識的存在者」(ens cognitivum) と「認識の外にある自然におけ

る外的な実在的存在者」(ens reale extra cognitionem in natura)を意味する。

すべての流出の第一の始原である一そのものは、非被造的なものであれ、被造的のものであれ、すべての存在者のうちへと溢れ、発芽し、咲き、呼吸し、ないしは注がれることになる。まず非被造的なものすなわち神なものにおいては、真は一のみから生まれ、一と真の両者、しかもそれらが一なるものである限りにおいてのそれらから発出するのが善であり、つまり一、真、善は神なものにおいては、父、子、聖霊の三つのペルソナに帰せられる。その意味において、一性は父性 (paternitas) であり、父から直接生まれる子には、一性から直接生まれる同等性 (aequalitas) が帰属する。これに対して、被造的なものにおいては、一から真が発出し、真から一そのものの力によって善そのものが降下してくる。

4. 人間が人間であること

『ヨハネ福音書註解』第95節によれば、人間であること条件として以下の三点があげられている。すなわち 1) 人間は謙遜でなければならない。2) 人間は理性的動物である。3) 人間はすべての下位のものを自己自身の下に従属せしめている。

第一については、人間 (homo) は大地 (humus) から由来しているものとして謙遜 (humilis) でなければならないといわれている。同第318節においてエックハルトは次のように述べている。「謙遜は神が下りてくる天の梯子であり、それによって神は人間の方へ来るのであり、人間は神の方へ行くのである。真の謙遜は人間に神を生んだのであり、死すべき人に生命を与え、天を新たにし、この世界を浄化し、天国を開き、人間の魂を開放したのである。」¹⁰⁾ その理由は、エックハルトによれば、上位のものはその本性と属性によって、その下位のものみに流入し、自己自身を伝達するからである。すなわち神のみに従属せしめられること、これが真の謙遜である。上位のものが下位のものへ自己自身を注ぎ込むように、謙遜なる人間に神は自己自身を恩寵として注ぎ込むのである。謙遜は神の恩寵を受けるための第一の前提といえる。

第二についてはエックハルトは『デ・アニマ』第三巻に依拠しながら、次のように述べている。「人間は知性と理性によって人間である。知性はここや今を離れて見るのであり、それ自体として、いかなるものとも共通のものを有することなく、混合されざるものであり、(質料より) 分離したものである。」¹¹⁾ そして知性は人間を人間たらしめるものとして人間の生命である。エックハルトによれば、知性は非被造的であ

り創造されたものではない。人間は、身体的存在である限りにおいては、死すべきものであるが、理性的魂 (*anima rationalis*) によって活かされていることからすれば、死すべきものではない¹²⁾。『ヨハネ福音書註解』第10節に「言葉すなわち理性は人間に固有である理性的なるものに関わる」¹³⁾と述べられているが、その意味において、知性は本来永遠の世界に属しており、事物をその原因において捉えることにおいて、「こことか今を離れて見る」ことができるのである。なぜならば、上に述べたように、善そのものの理念が真の内にあるように、外的事物の原因は知性の内にあるからである。知性の対象は「全き存在者」(*ens absolute*) であって、「これとかあれとかの存在者」(*ens hoc aut illud*) ではない。ここにおいても、善に対する真の優位性が表現されている。

第三については、『詩篇』第1篇8節「すべてのものをあなたは彼の足の下に置いた」また『創世記』第1章28節「地に満ちよ、そしてそれを従属させよ、そして地にうごめくすべての動物を支配せよ」という聖句に基づいて解釈されている。そしてエックハルトは『ヨハネ福音書註解』第549節において、人間と人間以外の被造物との差異を次のように述べている。「人間の下に位置するすべての被造物は神の似像に向けて (*ad similitudinem dei*) 造られており、あるもののアイデアは神の内にある。しかし人間は神の全き実体の似像に向けて (*ad imaginem totius substantiae dei*) 造られており、そのように人間は神に似たものに向けてではなく、一に向けて造られている」。ここから明らかになることは、神に似たものに帰ることが人間を満足させることではないということである。そうではなくて、人間がそこから出てきた一に帰ること、このことのみが人間を満足させるのである。人間の最後の目的は父としての真なる神の認識であり、またそのことは、一がすべての流出の第一の始原であるかぎりにおいて、人間が自己自身の本来の原因に還帰することを意味する¹⁴⁾。

これら三つのことはお互いに関連しているが、それらの根底にある人間への要請は質料や時間的なものすなわち被造的のものからの脱却である。謙遜による神への従属は被造的世界から脱却し永遠なる神の国へ入るための人間の信仰的態度であり、こことか今を離れて見る知性の働きはそのための魂の能力である。人間は理性的魂を有することによって他のすべての被造物とは異なっている。

しかしそうはいっても、被造的世界に住む人間は神とはアナロギアの関係にある。その人間が自らの存在を神に向かって渴望する運動は父なる神を認識するまで止むこ

とはない。しかしそれを可能にするのは、第2節で述べたように、人間の功績によるのではなく、神からの純粹なる恩寵である。以上のことを踏まえ、以下において、受肉と子の意義について考えてみたい。

5. 受肉と子の意義

エックハルトは、『ヨハネ福音書註解』第171節において、子の位置を「神とわれわれとの間の媒介者」(mediator inter deum et nos)と定義している¹⁵⁾。さらには、同第557節においては、「すべての被造物は同等性を媒介して一性から降下してくる」¹⁶⁾と述べられている。上に述べたように、同等性と一性は子と父を意味するが、被造物は、ここでは、不等性 (inaequalitas) といわれる¹⁷⁾。同等性と一性との関係は、『ヨハネ福音書』第10章30節「私と父とは一である」(ego et pater unum sumus) からいって、同等性はある種の一性であり、その関係は、同第14章11節「私は父のうちにあり、父は私のうちにある」(ego in patre et pater in me est) からいって、同等性は一性のうちに、一性は同等性のうちにとどまっている、という構造を有している。それに対して、同等性と不等性との関係においては事情は異なり、同等性は不等性のうちに潜勢しているのである。同等性は、その本性からして、一性そのものから発出してくるが、不等性は同等性の媒介なくしては一性から降下してくることはできないのである¹⁸⁾。

存在、一、真、善という、本来神自身に帰属するものを、人間は神の子を媒介にして受け取ることができる。「神の子を媒介にして」とは、言葉が肉となりわれわれのうちに住むという神の受肉によって、ということの意味する。エックハルトは、この受肉の意義について、『ヨハネ福音書註解』第117節において、「本性上神の子である言葉の受肉の成果は、われわれが神の養子になることによって神の子になるということに存する」¹⁹⁾と述べている。しかしだからといって、われわれはイエス・キリストではない。キリストはその本性からして、神の独り子であり、「出生によって」(per generationem) 子であり、その出生は存在、種そして本性へと導く。それに対して、われわれは「再生によって」(per regenerationem) 子であり、その再生は「本性の同形性」(conformitas naturae) へと導く。すなわち、子であることにおいて、キリストとわれわれとでは、その方向が逆である。

以上のことから、受肉そのものは神のペルソナの発出と被造物の産出の中間的なも

のである。その意味において、受肉は「永遠なる流出の模造 (exemplata ab aeterna emanatione) であり、「下位の全なる自然の範型」(exemplar totius naturae inferioris) である。また、イエスは理念および言葉を同時に意味するものとしてロゴス・キリストである。

しかし、すべての人間がロゴス・キリストの意義を真に認識するとはかぎらない。エックハルトは、『ヨハネ福音書註解』第44節において次のように述べている。「子は父のうちでは言葉であり、すなわち造られたものではない理念ではあるが、同じ子がこの世界においては、言葉ないし理念そして認識する知性の属性の下にはなく、存在の属性の下にあるのである。それゆえに、世は言葉によって生じたのであるが、世はそれを認識しなかった。」²⁰⁾ ここでいわれている「存在の属性の下に」の存在とは、それが言葉、理念、認識との対比において語られているかぎりにおいて、外的存在、すなわち「これとかあれの存在者」を意味している。このことは善に対する真の優位性に対応する。知性は事物をその理念において捉えるように、人間はキリストをその本性すなわち言葉・理念として認識すべきである。しかし人間の知性は例えば情念に関わるものとして被造的のものに覆われている。そして人間は自らの存在を神の純粹なる恩寵、神の子から受け取っているにもかかわらず、自己から所有していると思込んでいる。すなわち、「世は彼を認識しなかった」のである。「神を認識するものは、すべての被造物が無であることを認識する」²¹⁾ とあるように、人間は、まず、自らの空虚性を認識しなければならない。

6. 結 語

アナロギアの論理によって明かとなった創造者である神と被造物である人間との決定的なる存在論的差異において、人間は自らの被造的存在が本来において空虚のものであること、そして神から存在を受け取っていることを認識する。それは、常に神を渴望し、神を食しているということの意味する。これがエックハルトが捉えるアナロギアの本性である。

人間における神への渴望は自己自身がそこから流出してきた第一の始原・父なる神を認識するまで止むことはない。しかしその認識は、われわれが神からの純粹なる恩寵、神の養子となることによってはじめて可能になる。そのために、人はイエス・キリストを信仰によって受け入れ、そしてキリストを理念・言葉すなわち神と人間との

間における媒介者ロゴス・キリストとして認識すべきである。つまり、アナロギアとは、エックハルトにとって、*ἄνα-λόγος*《「ロゴスへ向かっていく」(hinauf zum Logos) ことである。エックハルトによれば、『ヨハネ福音書』第10章9節「私は門である。ある人が私を通して入るならば、その人は救われるであろう。彼は入ったり、出たりして、そして草地を見出すであろう」において、「入ったり」を神性の認識と喜びすなわち父なる神と永遠なる生命と神の国に関する認識と喜び、「出たり」を被造物の認識と喜びすなわちイエス・キリストに関する認識と喜びを意味することになる²²⁾。

註

エックハルトの著作からの引用は下記のものによる。

Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff. (DW=Deutsche Werke; LW=Lateinische Werke).

- 1) *In Eccli.* n. 52; LW Bd. 2, S. 280.
- 2) *In Eccli.* n. 52; LW Bd. 2, S. 281.
- 3) *In Eccli.* n. 53; LW Bd. 2, S. 282
- 4) *In Gen.* II n. 22-26; LW Bd. 1, S. 492-496.
- 5) *In Ioh.* n. 182; LW Bd. 3, S. 150.
- 6) *In Ioh.* n. 562; LW Bd. 3, S. 489.
- 7) *In Ioh.* n. 512; LW Bd. 3, S. 443
- 8) *In Ioh.* n. 513; LW Bd. 3, S. 444.
- 9) *In Ioh.* n. 562; LW Bd. 3, S. 490.
- 10) *In Ioh.* n. 318; LW Bd. 3, S. 265.
- 11) *In Ioh.* n. 318; LW Bd. 3, S. 265-266.
- 12) このことは『創世記註解』第77節において述べられる被造物における二重の存在 (duplex esse) に対応する。第一の存在は「潜勢的存在」(esse virtuale), 第二の存在は「形相的存在」(esse formale) といわれる。前者は神の言葉の内にあり、確固として恒常的であり、それに対して、後者は外的なものの世界における存在であり、虚弱で変化しやすいものである。
- 13) *In Ioh.* n. 10; LW Bd. 3, S. 10.
- 14) ここは、もはや、アナロギアの論理が成立する次元ではない。この世界は創造者としての神と被造物としての人間という関係を超越した世界、父と子との univocatio が成立する世界である。

- 15) *In Ioh.* n. 171; *LW* Bd. 3. S. 141.
- 16) *In Ioh.* n. 557; *LW* Bd. 3, S. 487.
- 17) 被造物は一から落下したものであるかぎりにおいて、一の否定を自らの内に持つ、すなわち一の否定としての「多」であり、差別を有し、不等なるものである。被造的存在はその原因を一である第一原因に有していないので、「これとかあれの存在者」である。人間はこの存在にとどまっているかぎり、本来の自己自身の認識は不可能である。人間は本来の自己を失って存在しているともいえる。しかし被造物からの脱却は一の否定である多の否定であり、そこに否定の否定としての一への道、本来の自己へ還帰する道が開けてくるのである。
- 18) ここに、一性と同等性とは同名同義的關係であり、それに対して、その両者と不等性との関係はアナロギアであることが明らかになる。
- 19) *In Ioh.* n. 117; *LW* Bd. 3, S. 101.
- 20) *In Ioh.* n. 44; *LW* Bd. 3, S. 37.
- 21) *Pr.* 68; *DW* Bd. 3. S. 149.
- 22) *In Ioh.* n. 563; *LW* Bd. 3, S. 491-492 を参照。